エミリイ・ディキンソンの詩論

樋　口　日　出　雄

父親エドワード，生年，1803年。妹ラヴィニヤ，没年，1899年。こうして列記してみると，エミリイ・ディキンソンの家族は19世紀という世紀全体をほぼ取囲んだ一家であるということができる。ディキンソン家にとって，ゆかりの地アマーストに今日でも残されているエミリイの生家は，この詩人を愛する人々の手で手厚く保管されているが，その昔，開拓者によって町の礎が据えられて以来，丸木小屋に近い木材建築物ばかりで占められたこの町の歴史に，最初にお目見えした石材建築物の中のひとつであったという。他のひとつには，1821年に創立されたアマースト大学があり，詩人の祖父はその発起人の中のひとりとして文書に名を連らねていたのである。コネクチカット渓谷によって，南北にわずかに開かれた谷あいの地形に望まれるアマーストは，良質の石材に恵まれて，レンガの製造も発達していく途中であった。マサチューセッツ州ハドリイ地区の一行政管区として開発が着手されてより，約一世紀後に大学の創立を為し遂げたアマーストは，地方の子女を教育することにあずかって力があった。この町の中心的存在であったエミリイの父エドワードが，この教育機関に関係したのは当然で，アマーストから異郷へ出た祖父の宗教的熱意にも動かされるところが多大であった事実もさることながら，司法関係の経歴を辿った彼は，財務理事を務める才能に恵まれていたのである。1863年には組合派教会と密な関係にあるこの大学より，名誉神学博士号を授与されたのも当然であった。宗教行事と大学行事に父のエネルギーが注がれるのを見る娘の眼に，アマーストはどのように映ったであろうか。

エミリイ・ディキンソンの生涯をどのように要約するにしても，この大学町の及ぼした影響は能うるかぎりおおきいのである。「アマーストにおける第一級の社会行事は，晩夏に催される大学卒業式と，秋期家畜振興祭とがあり，双方とも特別の宗教セレモニーと素人向きの出し物とが含まれていた」[(1)]のであるが，彼女の若年期において，これらの行事に付随する出し物を彼女が楽しみにしていたことは，よく知られている。一度などは，秋の家畜振興祭の一環として催された，手作りの味の品評会で彼女は，パンとケーキを出品し見事に第2位に入選しているのである。また講演などのあるたびに，大学の門を潜っていた彼女は，当然大学生とも親交を結び，のっぽで有名なジ

ョージ・ゴールドとも知遇があったことが知られている。彼の発行する大学新聞に掲載された散文のバレンタインが，彼女の活字となった最初の印刷であることはほぼ確実視されている。

カルヴィニズムの影響の強い大学町は，たしかに偏狭な自己満足や，習慣化したゴシップあさりの風習が瀰漫していた。アマーストから追放された多くの聖職者の中の一人を代弁して，その夫人が私の良人は野蛮な取扱いを受けたといい，「ニュージイランド人でも，少しはましな行動を取ったでしょう」と語気を強めて書き残していることには，多少の誇張はあるにせよ，アマーストにとけ込めないリベラルな人士の共通な不満が表現されているのである。カードやダンスや小説の耽読などが，公的には禁じられるほどの静かな町の雰囲気がエミリイの文学的雰囲気の一部を形成したことは事実だが，それはあくまで銅貨の半面で，裏を返せば，次のような彼女の言葉自体，すでに多くを語っている——(2)

> "They〔people of Amherst〕talk of Hallowed things, aloud —— and embarass my dog."

> "I think Carl〔her dog〕would please you —— He is dumb, and brave."

オーソドックスな共同体理念の中にあって，聖書が彼女の詩の題材の重要な部分を占めたことは勿論だが，いかに「神聖」（Hallowed things）さ自体を追求するにしても，自己の経験を唱うときには，「声高(こわだ)か」（aloud）であってはならないと彼女は決意している。聖書が万物の中心であれば，彼女は自分の職能をその中心に対する「周辺」（circumference）に設定しているのである。やがて，彼女のいわゆる「周辺」の詩は，「死」というテーマに集中した抒情詩に移行するが，時代をゆるがす情況とのかかわり合いの中で，彼女の核となり中心となる役割を果たしたのは一体何であったか。

II

ことは，いささか文体論にかかわる。奇妙なことだが，新興国アメリカの詩人たちは，単純で浅薄なカテゴリーの埒内をその活動範囲としていた。たとえば，ヘロイッ

ク・カプレット（英雄詩体二行連句）のエレガントなコルセットをまとっていたのが，ロングフエローを旗主とする「お上品な」一群の詩人であった。エミリイがその磨きあげられた言葉と，格調とをもってエリザベス朝風のブランク・ヴァース（無韻詩）に挑んだのは，革新的な意義がある。詩人にとって，市場は公衆であるが，芸術作品が作者の手を離れ，市場に出されることを，彼女自身は「競売」という言葉で言い表わし，一度情け容赦もない公衆の目に晒された作者の芸術家としての霊感は再び元の無心な姿にもどることのないであろうことを思い警戒していたのである。

エミリイが「お上品な」詩人群の轍を踏まなかったことには，いくたりかの原因が見出されるであろうが，少しく彼女の文体から，その本源の要素を抽出してみよう。当時，アメリカの詩は力尽きたもののように思われた。ロマン派の理想主義は，エマソンに代表されるように，その語彙が現実社会の情念と余りにも無関係であるが故に，具体的な存在を指示する機能を失っていたのである。エミリイにおける<真理><美><エーテル><あえぎ>等のロマン派的語彙は，その数限りない情動的連想の故に，一個の複合体を成し，超現実的であると同時に，現実を刺し貫く武器でもあった。

たとえば，キーツをまず連想させる次の詩篇には巧妙にロマン派のきらびやかな語句が配され，巧まずして彼女の愛読したアイザック・ワッツの讃美歌のミーターと和合を成し遂げている。

I died for Beauty —— but was scarce
Adjusted in the Tomb
When One who died for Truth, was lain
In an adjoining Room——

He questioned softly "Why I failed"?
"For Beauty", I replied ——
"And I —— for Truth—— Themself are One ——
We Bretheren, are", He said ——

And so, as Kinsmen, met a Night ——
We talked between the Rooms ——
Until the Moss had reached our lips ——
And covered up —— our names——
(3)

ミーターだけを抽出してみると，次の如く図式化され，これはワッツの讃美歌で，もっとも一般的な弱強格のコモン・ミーターである。

I died/ for Beau/-ty but/ was scarce	oó/oó/oó/oó
Ad -jus/-ted in/ the Tomb	oó/où/oó
When One/ who died/ for Truth/ was lain	oó/oó/oó/oó
In an/ ad -join/ -ing Room	ùo/oó/oó

コモン・ミーターの実例をワッツの讃美歌から引用してみると，"There is a land of pure delight" で始まる一篇に次の一連があり——

Could we but climb where Moses stood
And view the landscape o′er,
Nor Jordan′s stream, nor death′s cold flood
Should fright us from the shore;

これはまさに，詩作を始めた当時より，彼女が数度にわたり自作中に援用した個所である。その最初の例が，彼女の習作ともいうべきヴァレンタイン詩の中にあることは，すでに指摘した。エミリイの詩の旋律を「発作的」と評したヒギンソンが黒人霊歌を熱心に筆で写し取ったという事実は，この点で興味深い呼応を示す。というのも，エミリイの旋律も黒人霊歌のそれも，ともに讃美歌という共通の絶唱から発しているからである。音楽教育の個人教授まで受けた彼女にしてみれば，旋律に無関心であれというほうが無理であったにちがいない。ヒギンソンが黒人霊歌の中に見出したデスペレートな情動をエミリイの詩の中に発見できなかったことは残念なことながら，彼女の語句の意味の重層性はヒギンソンをして判断を保留させるだけの要素を多分に含んでいたのである。しかし彼女の詩の真価はヒギンソンの見たように，「発作的」というほどアメリカ詩の大勢と歩調を合わせた矮小化にあるのではなく，黒人霊歌の如く魂からの叫びをもって生き延びた点にあるのである。

Ⅲ

エミリイのポエティック・ディクションについては言い残した点もあるが，今は先

を急ぐことにする。19世紀後半という時間的広がりと，アマーストという空間に支えられた彼女が詩作に専念するに至るまでには，その他に，彼女の詩作衝動の中心部にあって内なる詩神を促がしたモーメントが存在するはずである。讃美歌のリズムも，文学的教養に恵まれぬ彼女にあたえられた重大な衣裳ではあったが，たとえていえば，それは獣の群が一頭の叫び声によって一斉に遁走する場合の「叫び声」とはならない。詩人にとってその「叫び声」は，たとえを続ければ，自身が属する群の「死の思想」を表現するものであるが故に，隙あらば敵の手中へ投げ返そうと企らまれているていの破壊的要素である。ある場合には，「私は墓場の前で泣く少年のように，不安から歌うのです」という文句で，彼女はその破壊的要素を抽出しようと試みた。彼女の断篇的な詩論を組合わせて，まとまった詩論を成立させようとすれば，まずこの「死の思想」と対決することを措いては何事も果されまい。

同じく讃美歌のミーターを借用した次の詩から察せられるのも，やはり「死の思想」であり，「獣の叫び」である。ここにおいて讃美歌のミーターを借りた，いわば借り物のリズムが，祭式において感じられる「死」のリズムに一致し，あるいは，「獣の叫び」に近い黒人霊歌の域に達するのを見る思いがする。

To hang our head —— ostensibly ——
And subsequent, to find
That such was not the posture
Of our immortal mind ——

Affords the sly presumption
That in so dense a fuzz ——
You —— too —— take Cobweb attitudes
Upon a plane of Gauze!

(J-P-105)

主導的なイメージは布地で，<fuzz>（綿毛）といい，<Gauze>（紗）といい，これらが形成する意味の連鎖に主要な意義が置かれている。少し大袈裟に言えば，此岸にある「綿」の世界と，彼岸にある「紗」の世界は，連らなって「存在の鎖」となり，すべては「綿」と「紗」のあいだの価値体系に照らされて価値づけされるとい

えるであろう。つまり，これは現世の「わが衆生」から来世の革命家へ「死の思想」を伝えるメッセージを盛った一篇であるともいえるのである。詩人は「くもの巣」という言葉によって，「綿」も「紗」も混同してしまう安易な「万物照応」思想を揶揄しているようにも見えるが，「死の思想」の観点からいえば，その意図するところは具体的には都市の大衆の閉鎖状況であり，象徴的には「存在」以前の「死」で，これは渾沌（カオス）といっても同義である。

何を着ようかと思い煩い，結果として「綿」をまとった婦人連の会食風景ででもあろうか。詩人の筆は諷刺的な調子を露わにし，誰かれとなく頭を低くしてあいさつを交わし，その都度，足の裏がむずかゆい思いをする「わが衆生」の風景描写から始めている。次の瞬間，詩人の正確な筆は，思わず二重の価値の世界へ踏込み，両刃の剣で「綿」の卑俗性を衝くと同時に，後半では「紗」の感触をもつ万人向きの「万物照応」思想，すなわち，粒選りと噂される都市エリートの創造した大衆向き神学に痛棒を食わすことになる。「紗」を噂したところ，「死の思想」という影がさしたのである。「死」が「綿」をまとった都市の大衆というイメージ化をとげ，いわばモッブ（俗衆）と化すとき，エミリイにおいて「死」を剝奪した大衆論へのモーメントを秘めた「万物照応」の楽観論は影を潜めた。

詩論という形態を追うこの小論の目的からは，いささか常軌を逸したことにもなったが，要は「死の思想」により「綿」的状況の深みから「紗」の「くもの巣」的感触へと進む破壊的投企があることを指摘したかったまでである。折あらば，これら破壊的要素は敵中に投げ返されて然るべきであるが，エミリイはこれを丸抱えに抱え込んだ。そしてそこ以外に彼女のいう「周辺」の世界は無いのである。一見「万物照応」思想と見紛う単色の世界に「死」という被膜が介在し，透明度を曇らせているのだともいえよう。

Ⅳ

エミリイの詩句で他と区別される最大の特徴は＜circumference＞と＜awe＞とであるという断定は，この詩人の権威あるモノグラフィー作者のジョンソン教授のものであるが，[4] 前者がどちらかといえば，哲学的な概念として，後者が心理学的概念として考察されることは望ましいことであろう。そして両者が結合して言葉の空洞化を

防ぎ，彼女の詩論の母体となっていることが実証されれば，讃美歌のメロディーの裡に詩人が構築しようとする詩の全体像がおのずから究明されていくことになろう。

所在なくしているある日，詩人が眺める景観の中に，たしかに哲学的にも心理学的にも解される一瞬が訪れる——

> . . . and when, far afterward, a sudden light on orchards, or a new fashion in the wind troubled my attention. I felt a palsy, here, the verses just relieve.

警句的な短文を綴り合わせて形成される文学空間に漂よう彼女の＜a new fashion in the wind＞という言葉自体，パスカル風の空間恐怖があり，同時に無限の空間への破壊的情動を秘めた投企がある。しかるのちに——「私は震撼され，ここに詩が蠢めく」という文句が続く。哲学的にはパスカルの尾を引きながらも，心理学でいうところの「死の衝動」がここに表明されていることを知るのである。

が，それにしても，この＜a new fashion＞は余りにもエマソンの詩論にある＜a new thing＞に似通ってはいまいか。

> For it is not meters, but a metre-making argument that makes a poem,——a thought so passionate and alive that like the spirit of a plant or an animal it has an architecture of its own, and adorns nature with a new thing.
>
> (Ralph Waldo Emerson: "The Poet" from *Essays*)
> (5)

もちろんエミリイはエマソンの著作に親しんでいたし，その詩論にも触れていたはずであり，偶然の一致といってはすまされまい。コンコードに住み，土曜クラブなどの例会に出席するためにボストンに足を運び，そこでボストン知識人と交じわったエマソンは，ヒギンソンの友人でもあったが，その彼もエミリイにとっては，磨かれた「花崗岩」で，イメージが硬質であるという点からいえば，エミリイの近親であったことになる。ヒギンソンの言によれば，エマソンはエミリイを評価するにあたって，「銃を用いずして鳥の名をあてる」方式をヒギンソンに勧めたというが，エミリイがヒギンソンではなくて，エマソンを相談相手としていたならば，ヒギンソンのような優柔不断ではなくて，より直截な評言が聞けたであろう。たとえそれが「くもの巣」

的感触をもった否定的評言であったとしても……。

エミリイの詩の骨格ともいうべきものが「死」であり，骨格を問題視する際に「死」を中心として，時に哲学的な「死の思想」を視点とし，時に心理学的な「死の衝動」を視点として見るならば，エミリイの最大の特徴として数えられた＜circumference＞と＜awe＞という二語の意義が，ここで再び問われるべきであろう。ヒギンソンにはついに彼女の「死」の論理も衝動も，ともに伝わってこなかったものと思われる。万物の神経系の中枢ともいうべきこの「死」の感触——エミリイによって「風の中の新しい情動」といわれ，エマソンによって「自然に付加される新しい何物か」といわれたこの感触——は彼の優柔不断の裡からこぼれ落ちたようにも見える。ただ漠然とした形でではあるが，ヒギンソンはこの詩人の詩句の裡にある，ある感触をひとつのイメージとして受けとめてはいたのである。「傾き」というそのイメージこそ，今や「死」を介在させて，当面の曖昧な二語のあいだを連結させる要素として，ふたつの語の意義とともに問い直されてくるのである。彼女がどのような経過でこの「傾き」のイメージを手中にしたかは，当面のふたつの語義の裡のイメージと同様，すべてが明白というわけにはゆかない。ただ今は彼女の読書傾向から，およその見当だけをつけておくことにする。ヒギンソンの愛読書を尋ねた質問に，韻文ではキーツ，両ブラウニング，散文ではラスキン，サー・トマス・ブラウン，黙示録をあげて答えているところから，おぼろげながら，エミリイの詩的イメージの源泉が辿られるのである。アメリカ作家が一人として登場しないことは注目に値するが，この辺の事情を詳しく探ることは別に他稿を用意することによって果したい。

V

所在なくしているある日，エミリイを訪れる幻想の中に「死」の感触があることは，先に摘出したとおりであるが，あえていえばこの感触は——「周辺」という哲学的用語を以てしても，何かが欠落し，「畏怖」という心理学的用語を以てしても測りきれないという意味で——まさに彼女の精神をよぎる流動体の感触として把えられる。彼女には「周辺」と「畏怖」とを直結させた「畏怖の周辺」(circumference of awe)という用例さえ見出されるほどであり，両者のあいだの溝は密着させられており，したがって，このような感触としての「周辺」に気を配る用心深さは彼女をして，流動

体中（in the wind）の「畏怖」（palsy）を感得させずには措かない。彼女の詩論のラジカルな部分がここに発していることが知られるのである。

さらに一篇を引いてみると——

At Half past Three, a single Bird
Upon a silent Sky
Propounded but a single term
Of cautious melody.

At Half past Four, Experiment
Had subjugated test
And lo, Her Silver Principle
Supplanted all the rest.

At Half past Seven, Element
Nor Implement, be seen ——
And Place was where the Presence was
Circumference between.

(J-P-1084)

この詩にあって第三連に連鎖的に表われる "Element" "Implement" "Presence" "Circumference" という一連の詩句には，彼女の詩論において中核となる要素が精妙に表現され，あたかも古来より伝わる錬金術の用語で詩論が展開されているような印象さえ読者にあたえかねない。ことに，第二連にある「銀の原理」という一句の重さを考えると，彼女に言葉の錬金術師の名をあたえたとしても不似合いとはならない。さらにいえば，個体の発するメロディの一楽章が音楽的錬金術によって，あるいは他のメロディとの和音合成によって音量を増し，あるいはついに音色（エレメント）も音階（インプレメント）も超えたある領域へと進む過程を考えるとき，彼女と錬金術との係り結びを一層強く感じるのである。

詩人であり，みずから評論も書くJ・C・ランサムがこの詩にふれて，第三連だけを午後の記述ととり，前二連との対比を強く打ちだした立論を思い出してみてもよいが，[6] その慧眼には驚かされるものがある。一連と二連を通じて伝わってくる錬金術的

なメロディの交響曲は，三連に至って，鋭いハイ・キーの連音符を打ち込まれ転調する。これこそ「周辺」という哲学的用語でも，「畏怖」という心理学的用語でも歯の立たないあの感触——午後のたそがれどきに森羅万象すべてが溶解するあの流動感——を見事に拉致したものではないか。午前から午後への変化の錬金術で見事に仕上がった詩想のあいだを，「存在」が舞い，「周辺」が鳴動する。

ランサムは彼女の「周辺」とは「原理」が姿を消したといいながらも，必ずしも死滅してはいないある場所を指すと考えており，ラジカルな基底部としての「周辺」の世界を認めているが，この小論の論旨にひきよせていえば，「周辺」の中に「存在」があり「存在」に「周辺」が接しているといった，いわば「存在」と「非存在」との未分化情況は，彼女の詩論にあって流動感として詩想にあらわれる。「原理」と「周辺」との交錯を問題視するランサムのものいいの微妙な屈折には，詩人らしいナイーブな感覚が窺えるが，次の瞬間ランサムは居直って，これこそアメリカ精神（アメリカニズム）の核にあるものだと揚言するのである。このアメリカニズム論の当否はこの場では問わないことにする。

ランサムの見事な解釈にもかかわらず問題は残るようだ。彼は "Presence" や "Circumference" などのラテン語法を注視し，そのレトリックに目を奪われているようだが，提議されている問題は，むしろ次の点にあるのではないだろうか。エミリイはラテン系の語句を折込みながら，その間隙に重い "W" 音のアリタレーションを折込む——

> And place *w*as *w*here the Presence *w*as
> Circumference between

このような頭韻によって彼女が訴えかけているのは，＜周辺＞と＜存在＞との＜間＞（between）にある精神の至高点，すなわち「死」のもたらす重い主導低音であることはすでに明白である。流動感の中にあっても，「畏怖」として伝わってくるこの「重さ」は重要な感触として認められる。ここに彼女の詩が生まれる。万物は流転し周辺は鳴動するのである。

（完）

Note

(1) John B. Pickard, *Emily Dickinson*, P. 9

(2) *Ibid.*, p. 9.

(3) Thomas H. Johnson, *The Poems of Emily Dickinson*, I, (No. 449)

以下ジョンソン版の番号Xを（J-P-X）で表わす。

(4) Thomas H. Johnson, *Emily Dickinson: An Interpretive Biography*, P. 134.

(5) Ralph Waldo Emerson : *Selected Prose and Poetry*, (Holt, Rinehart and Winston) , P. 320

(6) John Crowe Ransom, "Emily Dickinson: A Poet Restored", From *Perspective USA*.